徹底した省力化で大規模経営を確立
～新鮮なピーマンを少しでも早く消費者の元へ～

稲沢市　近藤　硬（つよし）さん・千代子さん
施設野菜（ピーマン）　【平成 28 年８月 19 日掲載】

自動計量・包装システムの導入による徹底した省力化を実現し、県内で類を見ない大規模ピーマン経営を確立するとともに、「新鮮なピーマンを少しでも早く消費者の元に届けたい。」と常に先を見据えて取り組んでいる、稲沢市の近藤硬さん・千代子さんご夫妻をご紹介します。

施設ピーマン栽培の始まり

近藤硬さん・千代子さんご夫妻

近藤硬さんは代々続く農家の長男として育ちました。後継者として農業高校に進学し、卒業後は高知県の施設ピーマン農家で１年間研修を受けました。当時、父親は露地ピーマンを栽培していましたが、硬さんは「ピーマンはトマトなどと違って袋詰め出荷なので、パッケージで差別化できる。特に、単価が高い春期に出荷できる施設栽培が有望。」と考えたのです。

研修を終えた硬さんは昭和 45 年に 13ａの施設を建設し、ピーマン栽培を始めます。最初は施設栽培と露地栽培を組み合わせてピーマンの周年出荷を試みましたが、夏期の作業がネックとみるや否や、すぐに施設栽培一本に絞り込みました。

徹底した省力化で、大規模経営、週休２日制を実現

昭和 53 年、硬さんは千代子さんとご結婚されました。千代子さんは非農家の出身で、結婚するまで農業の経験は全くありませんでした。当時は手詰めで出荷調製を行っていたため、朝早くから夜遅くまで、土日の休みもなく、働きづめの毎日でした。

やがて子育てが始まると、「生活パターンを変えることが必要。このままでは子どものためにもよくない。」と痛感します。雇用を導入していたことも、働き方を見直すきっかけとなりました。

そこで、硬さんは、当時はまだ珍しく、とても高価であった自動包装機や計量機をいち早く導入して出荷調製の省力化に取り組みます。「その後も包装機や計量機は性能の良いものに更新し、徹底した省力化に努めている。昭和 60 年には週休１日、平成 12 年には週休２日を実現することができた。個人で自動計量・包装システムを整備しているのは全国的にもあまり事例がないと思う。経費の負担は大きいですけど・・・。」と硬さん。

自動包装機

一方では、所得を確保するために計画的に施設を増設し、現在で

は、施設面積 70ａという県内で類を見ない大規模ピーマン経営でありながら、完全週休２日制（土・日曜日定休）という労働環境を実現しています。

天敵を活用した病害虫防除体系を確立

順調に経営を拡大してきた近藤さんご夫妻ですが、これまでの道のりの中には困難もありました。平成に入った頃、侵入害虫であるスリップス類が大発生し、ピーマンが甚大な被害を受けてしまったのです。「一時はピーマン栽培をやめようとまで思いつめた。当時は花き産業が全盛期であったので、作目転換しようと思い、ずいぶん花き農家を巡ったものです。」と振り返る千代子さん。やがて、硬さんは様々な方法で害虫防除に尽力するうちに、一筋の光明を見い出します。当時、導入に向けた現地試験が始まったばかりの生物農薬（天敵）の利用です。

それからというもの、次々に新たな天敵の導入に取り組み、現在では５種類もの天敵を組み合わせることにより、化学合成農薬を極力抑えた省力的な病害虫防除体系を確立しています。

新鮮なピーマンを少しでも早く消費者の元へ

「新鮮なピーマンを少しでも早く消費者の元に届けたい。」と硬さん。「朝から全員で収穫を始めても、収穫が終わるのは午後。それから出荷調製を行い、個選なので自ら市場まで運搬する。どんなに忙しくて出荷が遅くなっても、必ず新鮮なうちに届ける。」のがこだわりです。このこだわりは手詰めの時代から続いており、機械化された今日でも変わることはありません。

また、「安全・安心を確保するのは、生産者として当たり前。」と力強く語る硬さん。出荷箱に記載した乱数表示により、商品の生産履歴を遡ることができる体制を構築しています。「問題が起こってから体制を整えているようでは遅い。常に先を見据えて対応していくことが重要。今は金属探知機の導入を検討している。」と話していただきました。

包装済みの商品

農業でも一般的な企業並みの経営を

常に最新の技術を導入し、経営発展に努めている近藤さんご夫妻。オランダの技術を積極的に学び、環境制御を実施しています。現在は「あぐりログ」を導入して、施設内環境の見える化による栽培管理の改善に取り組んでいます。

さらに、近藤さんご夫妻は平成 24 年に経営を法人化し、近藤園芸株式会社を設立しました。将来の展望をお伺いすると、「農業でも一般的な企業並みの経営ができることを示したい。どの業界もやり方次第。農業も例外ではない。今後は、社会情勢を的確に捉えて出荷規格を見直すなどの対応が必要と考える。後継者への経営移譲を見据えて、その片腕となる正社員を採用し、次の世代にスムーズにつなげていきたい。」と語っていただきました。言葉の端々に近藤さんご夫妻のピーマン経営に対する熱い想いを感じることができました。

執　　筆：農業経営課
取材協力：尾張農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2016, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.